

「イエスですら、祈らなければならなかった」

(マルコによる福音書 1:29-39)

今週は先週の続き、カファルナウムの一日の後半部分です。「神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい。」と言われて活動をはじめた主イエス。主イエスとともに神の国が訪れます。主イエスの行かれる所に神の国が示されます。先週はそれが、会堂での奇跡を通して示されました。汚れた霊から人を解放することで、主イエスはわたしたちを神から引き離そうとする力から解放してくださること、神の祝福、愛を奪うあらゆる力からわたしたちを解放し、再び神様の祝福と愛に満たされて生きる、神様とともに生きる世界、神の国へとわたしたち皆を力強く招いてくださることが示されました。今日も主イエスは奇跡を行われます。

先週も申し上げましたが、奇跡は「しるし」です。それが何を示すものであるかを知ることが大切です。今日の奇跡を巡ってはいくつか言えることがあります。まず、奇跡がなされた場所についてです。会堂からシモンつまりペトロの「家」へと移動し、そこで主イエスは奇跡を行われました。そして、日が暮れて安息日が終わると今度は家の戸口で、主イエスは奇跡を行われました(人々が日が暮れて、安息日が終わってから病人たちを連れてきたのは、安息日には癒してはいけない、連れて行ってもダメとされていたからです。) これはつまり、主イエスは会堂に象徴される宗教的な場所でも、ペトロの家のようなわたしたちの普段の個人の生活の場においても、そして家の戸口に象徴される公の場においても、人間を苦しめる一切のものを追い払ってくださる、ということです。

次に注目したいのは、ペトロの姑が癒やされたことです。彼女は発熱していました。発熱とは、わたしたちにとっても身近なものです。主イエスはそういう日常のたとえ些細な事であっても、関わってくださるということです。また、戸口は個人が公の場へと出ていく場所ですから、社会生活全体の象徴と言える場所です。家でも、戸口でも奇跡を行われた主イエスは、わたしたちの人生の些細な出来事から、社会全体のことまでもつぶさにご覧になり、関わり、悪霊から解放してくださるのです。

当時、悪霊は人の生きる力を弱めて、病を引き起こすばかりか神様との関係を妨げると考えられていました。ですから、主イエスのなされたことは病の癒やしであり、神との交わりの回復でした。つまり、主イエスはあらゆるところ、すべてのところにおいて、わたしたちを悪霊から解放し、神との関係を回復し、神の国へと迎えてくださるのだということです。これが、今日の奇跡というしるしがわたしたちに示していることです。

病の癒やしとともに、神との交わりの回復をも主イエスはもたらします。このことは、ペトロの姑によってハッキリ示されています。それは彼女の癒されたあとの行動によって明らかになります。彼女は癒やされたあと「もてなした」とありますが、これは「仕える」という言葉です。つまり、彼女は主イエスによって癒され、神の救いに与ることで、仕えるものへと変えられたのです。彼女は主イエスに癒やされたことの喜びのうちに、主イエスが招いてくださる神の家族、神の共同体の交わりのなかに生き始めたのです。主イエスを通してなされる、神の癒やし、救いは人を癒やすだけではなく、生き方をも癒やします。「共に生きる」、「仕えて生きる」という、神と人と共に生きる本来の命、本来の姿が主イエスによって回復

されるのです。これこそ、主イエスとともに神の国が訪れる、ということに他なりません。

主イエスがそばへ来てくださることで癒される。神との交わりが回復される。神の国が訪れる。あまねく地に、あらゆる場所で、主イエスは人を苦しめる一切のものを追い払い、人を癒やし、命を回復し、神の国へと招いてくださる。これが、主イエスの使命です。すべての人にこの救いをもたらすために、主イエスはこの世へと来られたのです。ですから、主イエスは「神の国は近づいた」と宣言しながら、今日の福音の最後にあるように、一つの所に留まることなく「他の町や村」へと出ていかれるのです。奇跡を目の当たりにした人々は、主イエスをそこに留めておきたかったでしょう。そして、さらに奇跡を求めたでしょう。けれども主イエスはそういう華々しいところに留まるのではなく、この使命を負って歩み続けるのです。

ここに、今日の福音の大変重要なことが潜んでいます。これがこの原稿の最後に分かち合いたいことです。それは、この留まることのない主イエスの歩みは、神との交わりがあってなされたものであった、ということです。主イエスは鉄人だったのでしょうか。ある意味そう言えるかもしれません。けれども、主イエスは確かに、わたしたちと同じ生身の人間でありました。喜び、傷つき、怒り、恐れの中かで震え…そういう方でありました。わたしたちと同じなのです。しかし、主イエスは徹底的に神に従って歩みました。今日の福音でもそうです。華やかなところ、人の思いに留まるのではなく、使命のために出かけていくのです。わたしたちと同じ人間なのに、どうして、そのように歩めたのでしょうか。それこそ、祈ることによってです。祈りです。祈りによってなされる神との深い交わりが主イエスを支えていたのです。主イエスは朝早く、独りで人里離れた所で祈りました。今日の聖書には祈りの内容については何も記されていません。そこが問題ではないからです。大切なのは、どう祈ったかということではなく、主イエスは祈ったということです。神との深い交わりにいつも身を置いた、ということです。この交わりに支えられて主イエスは働いたのです。そして、この交わりに支えられてこそ、神の国の訪れ、神の支配を告げ知らせるのです。

わたしたちは、この主イエスに習わなければなりません。主イエスですら祈ったのです。であればなおさら、わたしたちは祈らなければなりません。神との交わりに支えられなければ、生きられないのです。主イエスはわたしたちの営みのすべてに関わってください、神と共に生きる命へとわたしたちを導いてくださいます。その恵みが自分に訪れていうことを信じ、わたしたちもペトロの姑のように、神と人ともに仕える歩みへと自らの歩みを変えなければなりません。しかし、神と人とを愛し、仕える、そういう歩みを続けることは簡単なことではありません。わたしたちの世界に厳然と存在する悪霊のちからは、わたしたちをその歩みから離れさせようとしています。だから、祈らなければなりません。神との交わりに常に身を置かなければなりません。そうして、神さまとの交わりに支えられて生きる。この歩みへと主イエスは招いておられます。主イエスは、わたしたちがどこに行っても必ず迎えに来てくださいます。

その主イエスの招きに応え、主イエスに習い、主イエスと共に祈り、神との交わりに支えられて歩んでまいりましょう。